

「松山東雲女子大学」

## 「しのモン応援隊」という

## 自分探しの旅

～学生の主体形成を支えるボランティア～

水島 祥子

●松山東雲短期大学現代ビジネス学科講師、  
宗教主事、ボランティアセンター長

学生は何をもって学生時代を満足だったと評価するのか。勉強、先生や友人との出会いだけでは高い満足度は得られない。ボランティア時の輝く表情や、卒業時に「一生の宝」と語るほどの活動が持つ魅力や可能性を探る。

## 1 主体性の尊重

熊本地震直後、「被災地入りしたい」「何かしよう！」

との学生の声。その熱い思いで、学生グループ「しのモン応援隊」（以下、しのモン）は結成された。昼休みに、学生とそれを応援する教職員が共に集まり、「女性と子どもへの支援」を掲げた活動が始まり、松山東雲ボランティアセンター（以下、センター）も活動に全面的に協力し

てきた。

しのモンでは、活動方針や募金方法など全てを学生が決定する。それは、本学の「世の鑑となる女性に」という教育目標に沿った主体性涵養のための大切な前提でもある。

本学では、1992年の大学設立当初から「ボランティア論」を正課科目として開講しており、理論に加えて活動体験を必須とし、実習先の選定や依頼・交渉を全て学生が主体的に行っている。学生の主体性を大切に大学が後押しするボランティアの土壌が育ちつつあり、東日本大震災被災地の支援活動も続いている。災害時にも力を発揮できるような主体性が平時から育まれており、しのモンはこの土壌から伸び始めた芽である。

## 2 人とのつながりと温もり

しのモンが東北や熊本への訪問や物資の支援などを保ち続ける活動を展望していた矢先の今夏、西日本豪雨が襲った。その翌日から学生は動き出し、しのモンは予定のチャリティバザーを急遽豪雨災害支援に切り替え、募金活動を行った。学生の思いに呼応した教員有志チャ



リテイライブの効果もあり、多額の募金が寄せられた。

その募金で、児童クラブの子どもたちに遊び道具や楽しい時間をプレゼントした。事前に「子どものための心理的応急処置（PFA）」を学んだ学生が子どもたちに寄り添う姿は、マスコミにも注目

されるところとなった。他大学と比較した学生意識調査では「教員と学生の距離が近い」「教員同士の仲が良い」などが高く評価されており、人とのつながり・絆の強さは本学の大切な財産であり、学生を育てる良い土壌である。それは、時に社会活動における思いがけない異種協同性や奇跡的な支援のリレーを生み出し、多くの人々との協働体験が学生に人とのつながりが持つ強さや温もりを伝えている。

### 3 仕える人になる

キャンパスから飛び出した学生は、甚大な被害状況を目の当たりにし、被災者の「私たちは非力かもしれないが無力ではない」、子どもたちの「空き地は今、瓦礫置き場やけん、遊べん」という言葉と出合う。世界中どこもが教室であり、「自らの学びには意味がある」と手応えを感じる事が達成感と満足につながっているようだ。

センターが把握する活動者数は、年間で全学生の延べ20%にのぼる。正課のボランティア論、実践の場として設置されているセンター、新たな動きとしてのしのモンパザなど、他者のためにという学生や教職員が進んで関わる社会活動が活発化してきており、建学の精神である「信仰・希望・愛」はこのキャンパスに豊かに息づいている。このような学生の多様な向社会的な思いや活動を、組織として確かな教育活動につなげる体制の整備が急がれる。ボランティア活動を通じた学生の自分探しの旅に寄り添いながら、教職員もまた東雲の学園名の由来である「夜明けを告げる光」たる人間のあり方と幸せの意味を探している。

「成蹊大学」

# ボランティアを通じた 成長機会の提供

久米 隼

●成蹊大学ボランティア・コーディネーター

伊藤 克容

●成蹊大学ボランティア支援センター所長、  
経済学部教授

はじめに

学生が数多くの経験を積み、知識や意欲を向上させられるように、大学は環境を整備し、機会を提供できるように努めなければならない。カリキュラムに含まれる正課の活動だけではなく、委員会や部活動など正課外の取り組みも重要である。ボランティアを通してさまざまな学生の成長意欲に適合した機会をデザインし、必要なサポートをするために、成蹊大学ボランティア支援センターは2014年4月に開設され、5年目を迎えた。試行錯誤の中で取り組みを続けてきた本センターであるが、「学生の幸福度向上」についてどのように考え、日々取り組み

ているかを整理したい。

## 1 ボランティア「支援」センターとしての心構え

本センターが重視しているのは、ボランティア活動の「支援」である。「指揮」や「指導」ではない。ボランティアを明確に定義することは難しいが、欠かすことのできない要素は「自発性」と「主体性」であろう。ボランティアは、誰かに強要されて行うものではなく、本人の自発的な意思に基づいて自分で発案し、主体的に取り組むことが重要となる。

渇水地域で水を配ることは、急場しのぎにはなるが、抜本的な問題解決ではない。井戸の掘り方を学び、修繕・維持する方法を身に付けることが、より高次元のゴールである。リスクや必要な資源を想定し、きめ細かく支援するのはもちろんであるが、過干渉や教え過ぎ(over-teach)を常に自戒しなければならない。自発的な取り組みが、学生の意欲や能力を高める上で必要な条件だという認識が本センター設立当初から共有されている。

本学では、ボランティア活動は当事者が自発的かつ主体的に取り組むことを大前提としている。そして、それ

を充実させるための基盤を提供するのが、本センターに与えられた役割である。従って、主役である学生が活躍する舞台を見守り、整備する「黒子」のような存在と自らを位置付けている。

## 2 支援体制の拡充

本センターでは、大学の教職員や専門職が緊密に連携し、学生の支援に当たっており、専門的な見地からボランティア活動の支援を行う専門職としては、「ボランティア・コーディネーター」が2名、常駐している。個々の学生のニーズは千差万別であるが、実践や研究で培った



きた経験を踏まえて、日々相談業務に当たっている。

学内施設の「価値」は、学生にとってのアクセシビリティでも左右される。本センターは、学生が気軽に立ち寄りやすいようにとの配慮もあり、2017年度に学生動線の多い区域に移転した。平日は9～17時

に開室していて、学生が授業の空き時間などにふらっと入りたくなり、いつでも気軽に相談できる雰囲気づくりを心がけている。

## 3 広がる「支援」の内容×変わらぬ基本方針

ボランティア活動に初めて取り組む際には、「どう探せばよいかわからない」「活動してみたいので、最低限の知識などを知りたい」といった悩みに直面する。本センターでは、多様な領域のボランティアに関する情報を提供するほか、個別やグループごとの相談を実施している。最近では、企画運営、組織維持のノウハウや意識向上のための啓発活動を実施するなど、支援の範囲は多岐にわたっている。

ボランティアの取り組みは、大学の社会的責任のひとつとして重要であるばかりでなく、学生の成長の場としても不可欠である。時代の変化や個々の学生のニーズに合わせて、支援の範囲は広がりがつつあるが、支援内容は拡張させつつも当初の役割を忘れないこと、つまり学生の主体性に任せた成長機会の提供こそが、最終的には「学生の幸福度向上」につながるという基本方針の下、日々の業務に当たっている。

【清泉女子大学】

## 建学の精神に基づいた活動を 目指して

岡戸 良子 ● 清泉女子大学ボランティアラーニングセンター長

### 1 “Think Globally Act Locally”

清泉女子大学ボランティアセンターは、2006年4月に設立された。センターの使命は、キリスト教ヒューマンイズムに基づく本学の建学の精神である「まことの知・まことの愛」になり、学生がボランティア活動を実践して自分で考え、判断し、決断できる自立した地球市民を育成することである。また、本学の母体である聖心待女修道会の創立者である聖ラファエラマリアは、「すべての人が幸せになるように働くこと、それが本当の愛」との言葉を残され、私たちは、ボランティア活動を通してその精神を継承している。

### 2 学生の主体性を重んじて

当初からの代表的な活動に、「ノートテイク」がある。これは、正に障害者と共に生きる共生社会を学内で実践し、体感することができるといえる大切な活動である。もう一つの主な活動として、フェアトレードがある。この活動も、学生が世界で起きている不平等と格差を学び、学内でフェアトレードカフェを展開している。また、環境問題に関しては、学内のエコキャップ回収運動を、地域と協働して、世界の子どもたちの命を救うワクチンの支援運動につながっている。こうした身近に実践できる地道な活動を、世界に広がる運動として学生が認識することは、地球市民としての自覚が芽生える良い機会になるものと確信している。

### 3 ボランティア活動を通じて地域とつながる

本学は、2015年に品川区との間で包括連携協定を締結した。これにより、連携先である地域の方々との絆が一段と深まり、地域連携活動の多様化が進展している。大学などの高等教育機関における専門性を生かした地域



難民支援募金活動を行うセンター所属の学生グループ

貢献活動の特徴は、知識共有型にあるが、その一例として、教員を目指す学生が品川区の小学校で行っている学習ボランティア活動がある。豊かなコミュニケーションと互いの信頼関係に基づいて、大学から地域への知識提供や、地域が求める支援情報の収集などを双方向に共有できる関係を構築することが大切であると感じている。

#### 4 サービスラーニングの手法を取り入れて

設立から10年を迎えたセンターは、2016年にボランティアラーニングセンターと改称し、学生の学びをより豊かにするために、サービスラーニングの手法である「省察」を取り入れ、教育的効果の向上を目指している。「省察」を通じてより深く学ぶことができるという経験学習理論の導入により、「体験すること」

を目的とするのではなく、「体験を通じて学びとること」を重視する活動に大きく舵を切ったのである。本学のボランティア活動において特記すべき点は、正課ではないということである。正課とは異なる学生の自発的な意思に基づく諸活動が、建学の精神の具現化につながっていることを改めて認識することができる。

#### 5 愛と奉仕 (Amar y Servir) から得る喜び

ボランティア活動を通して自己有用感、自己肯定感が高まるといわれるが、その要因は自分が必要とされ役割を果たしたことが他者から感謝されたというベクトルが内なる自分に働くからである。これらの活動を通じたつながりから生み出される多様な価値は、社会理解、他者理解、自己理解など、自分の生き方発見にまで広がることがある。これらは、座学だけで学ぶことは決して不可能である。本学に脈々と受け継がれている目に見えない「清泉スピリット」という価値は、カトリック精神に基づいたボランティア活動を通じて一人ひとりの心の中できちんと育まれ、卒業後も彼女たちの人生の指針となることを信じている。